

社会福祉現場実習における実習課題の達成について

牧野田恵美子、須之内玲子
小山 聡子、中谷 陽明

Achievement of Tasks in Social Welfare Fieldwork

Emiko Makinoda Reiko Sunoutsu
Satoko Oyama Yōmei Nakatani

1. 研究目的

社会福祉現場実習教育において、よりよい実習をするためには教育機関と実習施設・機関との連携はもとより、事前学習、事後学習が重要である。実習を体験したあとの学生の成長はめざましいものがある。しかし、必ずしも実習で十分な成果があがった学生ばかりとは言えない。それは、学生が実習で何を学びたいかによっても異なる。また、分野によっても異なるであろう。施設と福祉事務所や児童相談所のような機関では実習の成果が異なることは予想される。また、実習課題をどのように設定したか、課題の追求達成ができたかどうか実習成果に関係しているのではないだろうか。今回は、課題の追求達成その関連についてのみ検討することとした。そして更に実習の成果を得るためにはどのように実習課題を設定したらよいか、大学と実習機関における問題と留意すべき点について考察した。

2. 研究方法

1997年度に現場実習をおこなった本学の学生の実習課題の達成度と現場実習の成果について実習課題、レポート実習ノート、アンケートをもとに分析し検討した。

3. 結 果

1997年度に実習をおこなった学生は延べ148人だったが、今回はアンケートに回答した142名を対象とした。実習の成果について分析し、結果をまとめた。

1) 実習分野

実習分野についてみると、最も多いのが障害児者施設42名、30%、次いで児童施設32名、23%となっている。これは、児童相談所や福祉事務所のほとんどが2週間実習であり、児童相談所や福祉事務所と組み合わせて2週間を施設実習する学生と、障害児者施設、児童施設で4週間実習する学生がいるためである。なお、同じ施設で2週間づつ

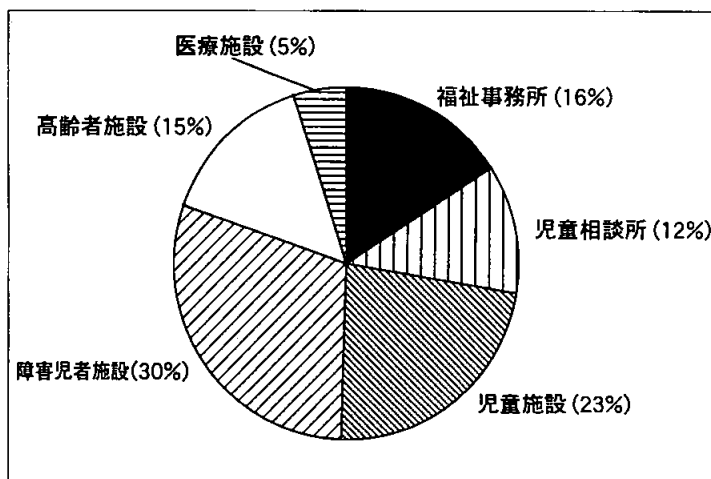


図1 実習機関 (N=142)

2回に分けて実習した学生は、それぞれについてアンケートに回答しており、その数は2名分となっている。その他の分野では、福祉事務所23名、16%、児童相談所17名、12%、高齢者施設21名、15%、医療施設7名、5%であった。(図1)

実習課題を「あまり追求できなかった」と答えた学生は16名(11.3%)に過ぎなかったが、実習課題をかなり追求できた学生22名(15.5%)と比較検討することにした。課題の追求がかなりできた学生を「課題達成」群と呼び、課題の追求があまりできなかった学生を「非達成」群と呼ぶことにする。それらの数こそ少ないが、実習成果と実習先の指導についての両群の違いは顕著であった。

2) 実習はどのように勉強になったか

「課題達成」群は実習が「大変勉強になった」と回答している者が95.5%を占めているが、「非達成」群は、「大変勉強になった」が56.3%と差が大きいことがわかる。なお、両群とも「あまり勉強にならなかった」と答えたものはいなかった。(図2)

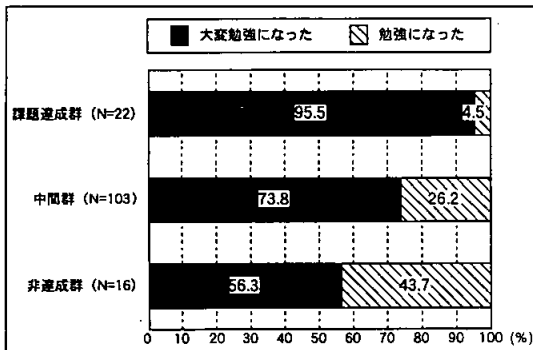


図2 「課題の追求」と「実習の成果」との関係

3) 課題に基づいた指導がされていたか

「課題達成」群では、「実習の指導は、提出した実習課題に常に基づいた指導がなされていた」と回答した者が31.8%いたが、「非達成」群では、6.2%にすぎない。なお、おおむねもとづいていたという回答を加えて検討しても、「非達成」群では

「課題達成」群の半数以上が課題におおむね基づいた、あるいは基づいた実習ができなかったといえる。(図3)

また、指導職員と実習課題や実習目的を検討したかについては、「課題達成」群は、「実習課題や

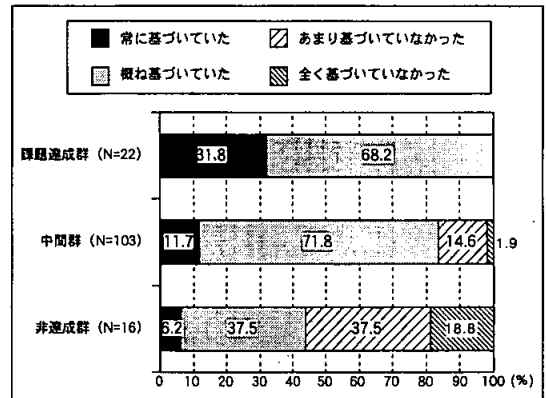


図3 「課題の追求」と「課題に基づいた指導」との関係

実習目的を検討をした」と回答している者が52.4%いるのに対して「非達成」群では、18.8%しかない。(図4)

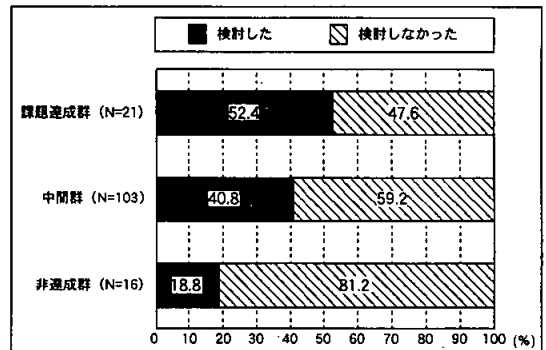


図4 「課題の追求」と「課題に基づいた指導」との関係

4) 実習指導職員によるスーパービジョンについて

スーパービジョンの回数を見ると「課題達成」群は、スーパービジョンを「何回かもらった」と答えている者が90%を占めているのに対し、「非達成群」では56.3%と「課題達成」群と比較して少

なく、「1回のスーパービジョン」のみだった者と「全く無かった」者の合計は37.4%となっている。(図5)

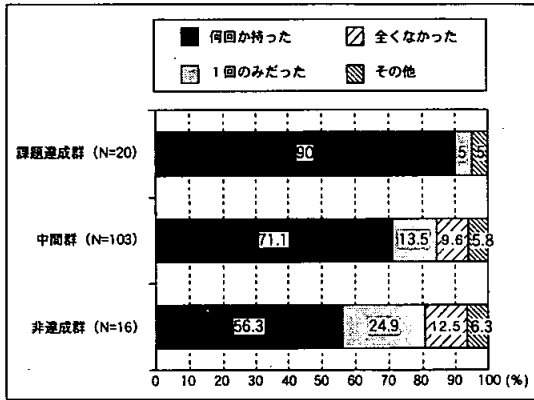


図5 「課題の追求」と「スーパービジョンの回数」との関連

また、スーパービジョンの有効性についてみると、「非達成」群で「スーパービジョンが大変役立った」と回答した者は、21.4%にすぎず、「課題達成」群の65%との差が大きいことが分かる。(図6)

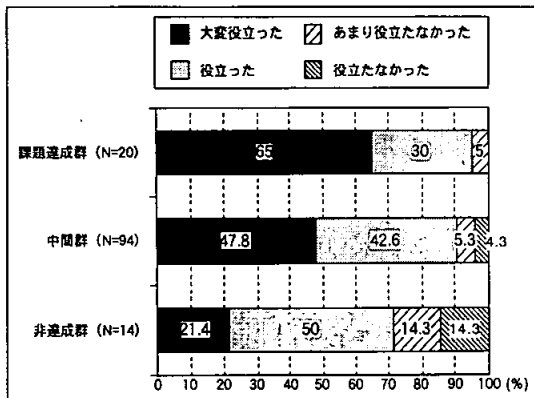


図6 「課題の追求」と「スーパービジョンの有効性」との関連

実習指導職員との関係についてみてみると、

「課題達成」群は、指導職員との関係がたいへんうまくいった者が27.3%いたが、「非達成」群は6.7%にすぎなかった。一方、「うまくいかなかった」と回答したものは「課題達成」群にはいなかったが、「非達成」群では20%あった。(図7)

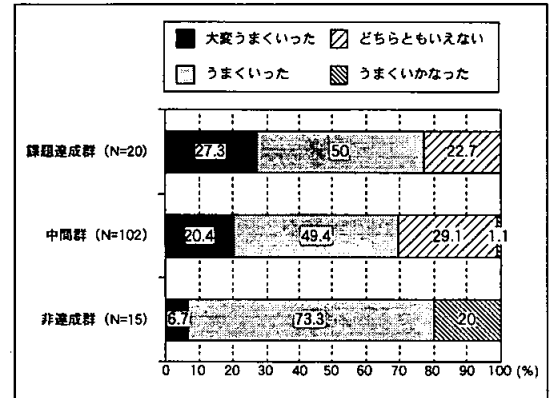


図7 「課題の追求」と「指導職員との関係」との関連

5) 実習の目的

実習の目的については、全体では第1位が「現場のことが知りたいから」で88.6%、次いで「社会福祉士の資格をとるため」が62.9%、第3位が「福祉分野で働きたいから」46.4%となっている。これを、「課題達成」群と「非達成」群を比較してみると、「非達成」群は、「実習してみたかった」というあいまいな動機のもの半数を占めている(複数回答)。しかし、「現場のことが知りたいから」、「社会福祉士の資格をとるため」という回答は、両群とも大きな差はなかった。また、「課題達成」群は、「処遇技術を学びたいから」が40.9%あったが、「非達成」群では25%にすぎない。(図8)

6) 課題の追求と勉強になったこととの相関

勉強になったことについて、全体でみると、「現場のことがよくわかった」が86.4%で最も多

く、次いで「専門職の意見が聞けた」が75%、第3位が「自己覚知に役立った」で45%であった(複数回答)。「課題達成」群と「非達成」群でこれを比較してみる。「現場のことがよくわかった」については両群とも差はあまりない。「課題達成」

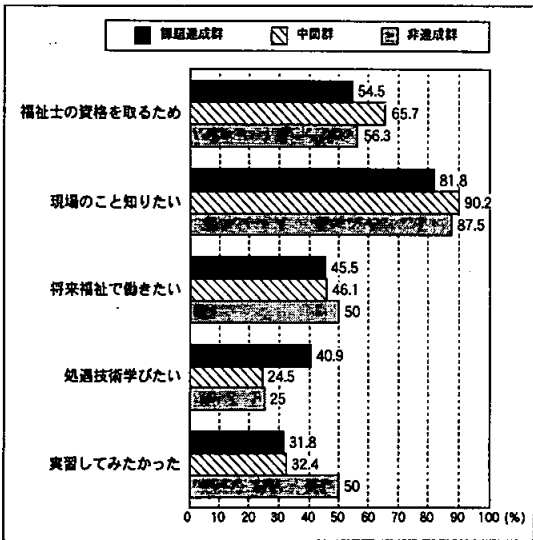


図8 「課題の追求」と「実習の目的」との関連

群では「援助にかかわることができた」が50%あったが、「非達成」群は援助にかかわることができた者は31.3%で、「課題達成」群と比べ少ない。

「非達成」群の学生も、実習を通して「現場のことが分かった」「専門家の意見を聞くことができた」「自己覚知に役立った」と答えており、7割の者は「実習前と比べて福祉を学ぶ姿勢は高まった」と答えている。また、「非達成」群では「自己覚知」に役立った者は68.8%で、他群と比べて多かった。「非達成」群が「自己覚知に役立った」のは、課題が達成できなかった理由や自己の問題をそれだけじっくり考えたためであろうか。「非達成」群は、実習に課題を残しながらも実習で得たことは多かった。(図9)

7) 実習課題の追求の達成が困難な理由

次に、学生の実習課題の追求の達成が困難であった理由についてその理由をレポートやアンケート

の自由記述から検討したい。

実習課題には多くの者が「利用者の理解とその福祉ニーズの把握」をあげており、これは「課題達成」群も同様であった。しかし、「非達成」群が課題を達成できなかった理由についてみると、「自分の勉強が不十分であったこと」「表面的なとらえ方しかできなかった」「自分の勉強不足」「慣れるのに精一杯だった」「積極的に動けなかった」「課題を頭において実習することができなかった」など、学生自身の実習態度に問題があったものがある。

一方、課題の立て方に問題があった者もいる。「課題が2週間の実習では達成できないものだった」4名、「多くの課題を求めすぎ、広く、浅くなってしまった」が2名おり、これらの課題の立て方については、実習前の実習教員が適切な課題が立てられるような指導が必要であったと考える。

2週間では達成できない実習課題は、「機能障害がもたらす社会的障害について学ぶ」「福祉現場における専門性について考える」「精神的、知的に障害のある人の自己決定への援助について」「子供との信頼関係を築く」などであった。

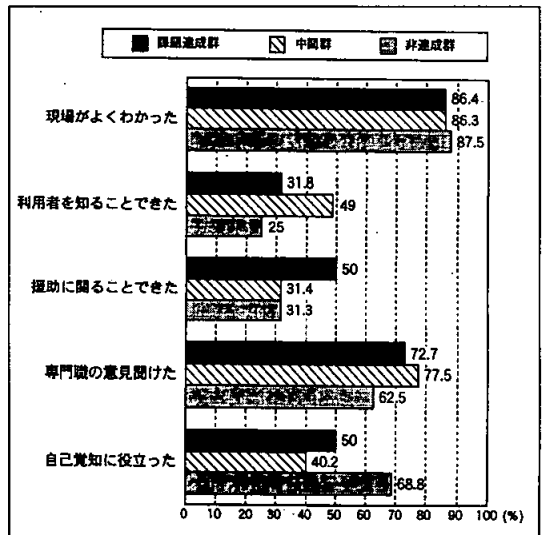


図9 「課題の追求」と「勉強になったこと」との関連

一方では実習機関・施設側の実習指導体制の問題もあげられていた。「夏休みで、施設の活動が休みで課題を追求できなかった」という障害児施設での実習生。「指導員業務や役割について課題を追求したかったが、指導員の業務についての実習ができなかった」という特別養護老人ホームで実習した学生。「実習先では、自分の立てた課題を職員が問題としていないため、課題が追求できなかった」と答えた学生は児童相談所で実習をしたが「不登校児の原因をどう捉えるか」「児童相談所の援助のあり方について」「子供の目の高さで見る目を養う」という実習課題を立てており、児童相談所ではそれらの課題に取り組んでいなかったり、問題が大き過ぎて実習で簡単に学ぶことができないテーマだったようだ。また、「実習指導者が多忙なためスーパービジョンの時間がとれず、課題についての検討ができず、質問などに答えてもらえなかった」学生もいた。さらに、3名の学生は「プログラムが決まっています、その範囲のことしか実習できなかった」と答えおり、施設側が、学生の課題設定に添って実習内容を変更することができれば課題が追求できたのではないかと思われる。

なお、「非達成」群の学生の一人一人をみると、真面目で実習へ成果についての要求も高いといえる。まあいいかという学生であったら、中間群に位置付けられたのではないかとも思われる。従って、「非達成」群だから必ずしも課題への取り組みが他の群より不十分だとはいえないことをつけ加えたい。

4. 考 察

「非達成」群の実習指導は、課題に基づいた指導がされておらず、「スーパービジョンが役立った」と認められず、実習指導者との関係が「うまくいった」と考えている学生が少ないなど実習指

導も指導者との関係も不十分だったと学生は考えている。大学側、実習機関・施設の両者がこの群への指導を検討し、よりよい実習ができるようにする必要がある。

大学側の指導の問題について

第1に学生の实習課題を達成できやすいものに変更するなどの指導が不十分であったといえる。学生の实習課題についてきめ細かい指導が必要で、実習の動機づけがあいまいな者に対して、動機づけを高める指導も不十分だった事を再確認した。

第2に、大学が実習施設と学生の課題達成の調整役を果たせておらず、大学側の実習中の学生への指導や施設との調整が不十分だったという問題がある。しかし、学生は、実習指導について実習先にあまり要求してはいけないという遠慮が強く、大学側に言ってもダメだろうと考えてか相談をせず、実習後に問題が明らかになることがある。実習巡回で、これらの問題が明らかになり改善された例もあるが、調整がうまくいかない場合もある。

第3には、学生と施設とのマッチングの問題がある。マッチングを考えながら、実習配属をしてはいるが、施設と学生の通勤距離の問題や福祉系大学が増え、実習生の配属が困難になっているという現状があり、マッチングの問題は理想通りにはいかないことが多い。

施設側の実習指導の問題について

第1に「課題追求達成」群では、実習課題についての検討を実習生と施設が行ない、役立つスーパービジョンがされている。学生の实習課題がその施設の機能からみて適切でないときには、施設側の実習指導により課題変更をしたり、学生の課題によってプログラムを変更するなどの考慮があるところはより良い実習ができています。

第2に、施設では日常生活の援助でケアワーク

が主で、実習生はケアワークに追われ実習課題を追求したり、検討する余裕がなくなってしまうことも多い。また、指導員実習や社会福祉士に必要な実習が十分できない施設もあり、ケアワーク実習の必要性を理解し、それを受けとめられる学生はよいが、指導員実習の実習に執着する学生や、利用者との関係づくりを追求したいと考えている学生は、課題が追求できなかったという気持を強く持つことになる。このことについては、事前学習の指導はしているものの、実習でのソーシャルワークの実践学習への期待が高い学生ほど失望感が強くなるようである。

第3には、施設側の実習生の受け入れの負担がある。施設は実習教育がその目的ではない。しかし、多くの施設が福祉職員の養成のためにと考えて実習生を受け入れているのである。1998年度からは教員のための介護実習が始まり、社会福祉士、介護福祉士、看護婦、ホームヘルパー、OT、PTその他、多くの職種、人員を受け入れるようになり、実習生を十分に指導する余裕がない。

なお、1997年に実習した学生のみを対象に検討を行なったので、「実習課題達成」群、「非達成」群の母数が少ないため、3、4年後に更に多い母数で再検討をする必要があろう。この検討を通して今後の実習指導の課題を与えられた。

参考文献

- 池田雅子, 社会福祉実習指導の現状と課題—配属実習における『実習プログラムの検討を通して—, 北星論集文学部, 第29号, 1992年
- 山井理恵, 社会福祉現場実習における体験場面とスーパービジョンの設定—スーパーバイザーによって用いられるスーパービジョン行動—, ソーシャルワーク研究, Vol. 22 No. 4, 1997年
- 山井理恵, 社会福祉現場実習における学習課題達成に及ぼす影響—学生の評価からの分析—, 社会福祉実践理論研究, 第7号, 1998年
- 竹内一夫, ソーシャルワーク教育における実習の現状とあり方を考える, ソーシャルワーク研究, Vol. 24, No. 2, 1998年
- 丹野真紀子, 牧野田恵美子, 学生の社会福祉現場実習における成果と福祉現場における意識について, 日本女子大学紀要 人間社会学部, 第7号, 1997年